

## 一緒になろう

2009.5.12(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

### 引用聖句

#### 使徒の働き 3章1節から11節

ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。すると、生まれつき足のきかない男が運ばれてきた。この男は、宮にはいる人たちから施しを求めるために、毎日「美しの門」という名の宮の門に置いてもらっていた。彼は、ペテロとヨハネが宮にはいると見るのを見て、施しを求めた。ペテロは、ヨハネとともに、その男を見つめて、「私たちを見なさい。」と言った。男は何かもらえると思って、ふたりに目を注いだ。すると、ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言って、彼の右手を取って立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、おどり上がってまっすぐに立ち、歩きだした。そして歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮にはいって行った。人々はみな、彼が歩きながら、神を賛美しているのを見た。そして、これが、施しを求めるために宮の「美しの門」にすわっていた男だとわかると、この人の身に起こったことに驚き、あきれた。この人が、ペテロとヨハネにつきまとっている間に、非常に驚いた人々がみないっせいに、ソロモンの廊という回廊にいる彼らのところに、やって来た。

#### 使徒の働き 4章1節から4節

彼らが民に話していると、祭司たち、宮の守衛長、またサドカイ人たちがやって来たが、この人たちは、ペテロとヨハネが民を教え、イエスのことを例にあげて死者の復活を宣べ伝えているのに、困り果て、彼らに手をかけて捕えた。そして翌日まで留置することにした。すでに夕方だったからである。しかし、みことばを聞いた人々が大ぜい信じ、男の数が五千人ほどになった。

#### 使徒の働き 4章13節、14節

彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。そればかりでなく、いやされた人がふたりといっしょに立っているのを見ては、返すことばもなかった。

#### 使徒の働き 4章22節から31節

この奇蹟によっていやされた男は四十歳余りであった。釈放されたふたりは、仲間

のところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの先祖であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。』事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行ないました。主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。」彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のみことばを大胆に語りだした。

先週私たちは「共なる生活の大切さ」について考えましたが、今日も少し続けたいと思います。最も大切なことは、そのことなのではないかと思います。

現代人の多くは、寂しく、孤独です。ですから、必要なのは「交わり」です。言うまでもなく、「御父並びに御子イエス様」との交わりこそ、最も大切なのではないかと思います。「御父並びに御子イエス様との交わり」とは、「光の交わり」であり、「いのちの交わり」です。また「愛の交わり」です。「主のからだなる教会の特徴」とは、それであるべきではないでしょうか。初代教会の人々は非常に魅力的な人々でした。「見て！見て！彼らは互いに愛し合っている。互いのことを信頼している。みな一つの家族だ」と。主はこのように心を一つにして交わっている兄弟姉妹を、捜し求めておられるのではないかと思います。

今読んでいただきました箇所は、使徒行伝からです。使徒行伝は、新しいことを教えるために書かれたものではなく、歴史の本です。「まことの教会」はどのように誕生したのか、そしてその後、主は救われた人々をどのように祝福し、導いてくださったかの報告です。

今、司会の兄弟は「今日のテーマは？」と尋ねました。「一緒になろう」と答えたのです。「一緒になろう！」。ただ今読みました3章8節、「おどり上がってまっすぐに立ち、歩き出した。そして歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮にはいって行った。」と。

ご存じのように2章では、「五旬節」、即ちイエス様の「からだなる教会の誕生」について書いてあります。即ち「主の御霊」が降って以来、初めの数週間以内にエルサレムでは、間違いなく一万人以上の人々がイエス様を信じ、救われました。

使徒の働き 2章41節

そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。

もちろんユダヤ人だけでした。異邦人は一人も入っていませんでした。

使徒の働き 2章47節

神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

毎日！

私たちは昔、あちらこちらで家庭集会が始まったとき、一つの原則的なことを考えたのです。家庭集会をするとき、「未信者が来なくなるなら止めましょう」と。もし、信者たちだけで集まるなら、うわさをし合ったりするようになるからです。家庭集会に新しい人が来なくなることは大きな問題です。(現在、そのような集会があることは残念です。)  
「主は毎日救われる人々を仲間に加えてくださった」と記されているからです。

使徒の働き 4章4節

しかし、みことばを聞いた人々が大ぜい信じ、男の数が五千人ほどになった。

男だけで五千人でしたら、女性まで入れればもっともっと多かったのではないのでしょうか。

2章には、多くの人々がみことばを受け入れ、イエス様を信じたことについて、書かれています。救われた人々が「どのようにして救われ」、また「救いによって何を経験したか」は、次の3章に書かれています。宮の美しの門に置かれていた生まれつきの足なえがいやされたという記事が書かれています。これは、私たち救われた者を、「主の御霊」がどのようにして導き、その信仰を全うさせなさいたいかを教えている一つの例ではないでしょうか。

最近イエス様を信じ受け入れ、救われた兄弟姉妹が、これから先どのようにして進むべきか、疑問を持っているかもしれません。そこでこの疑問に答えるために、この3章また4章の「病をいやされた人」を読んでみると、示されているのではないかと思います。

この男は全く新しくされました。「新しいいのち」、「新しい喜び」、「新しい目的」のもとに生まれ変わらされましたが、この男に起こったもう一つの事からは、イエス様を信じる

ようになり救われただけではなく、彼は「イエス様のからだなる教会」、即ち「信じる者の群れ」に加わった、とあります。この足なえはイエス様のみもとに来たそのときに、信じる者の群れに加わったということです。これは理屈では分かりませんが、この男はイエス様のみもとに来たとき、自分の生活を主にある他の兄弟姉妹とともに死、分かち合う生活に自然に入れられたのです。

今読みましたように、2章では、イエス様は救われる者を毎日毎日信者の群れに加えてくださったことが書かれています。3章では、救われて「からだなる教会」に加えられたということは何を意味しているか、ということについて書かれています。

イエス様によって捕えられた人は、高く引き上げられ今もなお天にいらっしゃる「イエス様と一つ」であるばかりでなく、「イエス様のからだなる教会」、即ち「地上の信者と一つ」なのです。イエス様を信じ、イエス様を受け入れ、イエス様に自分をお委ねした人は、その瞬間に救われたとともに、この救いを経験した人は救われた瞬間に信じる者の群れに加えられた、と使徒行伝を読むとはっきり言えます。3章、4章を読むと、いやされた足なえはいつもペテロとヨハネと一緒に歩んだのです。もう一度読みます。

使徒の働き 3章8節

**おどり上がってまっすぐに立ち、歩きだした。そして歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮にはいって行った。**

使徒の働き 3章11節

**この人が、ペテロとヨハネにつきまとっている間に、非常に驚いた人々がみないっせいに、ソロモンの廊という回廊にいる彼らのところに、やって来た。**

使徒の働き 4章14節

**そればかりでなく、いやされた人がふたりといっしょに立っているのを見ては、返すことばもなかった。**

と書かれています。

イエス様は、このいやされた足なえをからだなる教会に加えられたので、彼はペテロと一緒にいたのです。

今日ともに考えたいテーマは、「信じる者の群れに加えられた」ということはどういうことか、です。何を意味しているのでしょうか。

四つのことを意味しているのではないかと思います。

\* 第一番目。他の信じている者に、依り頼み合うこと、お互いに助け合うこと。

新しく主のいのちにあずかった人がこれから成長していくには、どうしても信者の群れに加わっていかないとまずいのです。ですから、今読みました3章8節、11節に、彼はペテロとヨハネと一緒にいました。病をいやされたこの足なえは、信者と一緒に同じ道を歩いて行きました。この足なえは、自分にとってこの交わりはどうしても必要であることを感じとったのではないのでしょうか。

何年前でしたが、フジテレビのニュースキャスターであった山川千秋兄弟は重病になりました。奥様はそれまでどこかの教会に行っていたのですが、吉祥寺集会に来るようになったのです。彼女の話によると、「主人は全然駄目。宗教は大嫌いです」とのことでした。

その後、時が与えられて病院を訪問しました。「ごめんなさい。今呼びに行くと、主人は何か失礼なことを言うかも知れませんが、その時はごめんなさい、ごめんなさい」と泣きながら言ったのです。しかし、山川千秋さんは病院のロビーで待っていたのです。会った瞬間、なぜか分からないけれど、嬉しくなりました。「正直な男だ!」と思ったのです。看護婦さんたちはすぐに別の部屋を準備してくれましたので、三人ですっと交わりました。そして彼はその日、イエス様を信じたのです。悔い改めたのです。証拠として、彼は病院で勉強しようと思っていた歴史・政治それらの本を、次の日全部返したのです。意味のない本ばかりでした。希望を与えるものではなかったのです。更に、病室の前の名札を外してもらったのです。「テレビ局の人々に会いたくない。主にある兄弟姉妹と会いたい」と。つまり、新しい生活の一つの表われということではないのでしょうか。彼は他の兄弟姉妹を全く知らなかったのですが、「私たちは一つだ」とはっきり分かったのでしょうか。

交わりに加わるということ、足なえの男は誰から教えられなくても、自分から自発的に知りました。彼は、自分は天にいらっしゃるイエス様と一つであるばかりでなく、主のからだなる教会は、「この地上にいる信じる者一人一人」とも一つであるということを知ったのです。彼自身説明することはできなかつたでしょうけれど、はっきり分かったのだと思います。ですから、この3章、4章の中に何度も、「ふたりといっしょに」という表現が出てくるのです。いやされた足なえはペテロとヨハネの前を、喜びのあまり跳んで先を行った、とは書いてありません。「彼らとともに、ふたりといっしょに宮にはいった」とあります。ペテロとヨハネも、ともに喜んだに違いありません。けれどおどりがって歩きはしなかつたようです。普通に歩いていたと思います。

いやされた足なえはどうしてペテロとヨハネを待って、一緒に宮に入らなければならなかつたのでしょうか。足なえは四十年間も動けないまま、宮の門の前に座らされ、何とかして宮に入りたいと願っていたのではないのでしょうか。そのように長い間動けずにいたその男がたちどころにその病をいやされたのですから、大喜びで一人で入って、一人で宮の中に駆け込み、主を賛美し感謝したとしても、別におかしくはなかつたでしょう。不自然ではなかつたと思います。けれど、彼は一人で宮の中に駆け込むことをしなかつたのです。

「ふたりといっしょに宮にはいった」と記されています。また、彼がいち早く家族のもとに帰り、また友だちのところへ行き、自分の身に起こった不思議な救いを語った、ということも書いてありません。なぜ、この足なえはペテロとヨハネと一緒にいたのでしょうか。ペテロは足なえに向かって、足なえをいやすとき言いました。

使徒の働き 3章6節

**すると、ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」**

ペテロはイエス様を指し示し、イエス様の力によって足なえをいやしました。今足なえがいやされたのは、ペテロやヨハネの力ではありません。イエス様がおいやしになったのです。足なえは、ペテロまたヨハネに付いていく必要はなかったのではないのでしょうか。自分の道を行くことができたはずではないのでしょうか。けれども彼はそうしませんでした。

いやされた足なえは心の内で、直ぐにでもこの喜びを家族に伝えたい、と思う心もあつたでしょう。しかし心の奥底で、ペテロとヨハネに従って一緒に行かなければいけないということを悟ったのです。ペテロとヨハネは、「あなたは私たちによって病がいやされたのだから、私たちに従って来なければいけない。私たちの弟子にならなければいけない。あなたは私たちの群れと一つにならなければいけない」とは言わなかったのです。

足なえが群れに加わったということは、人が定めた規則ではありませんでした。足なえの「心の内」から湧いて出る深い「心の願い」でした。足なえがペテロとヨハネに従って行ったのは、彼らに対する感謝の気持からではなく、また規則を守りたかったからでもありません。また、ペテロとヨハネの人柄を見て、良い人たちだ、自分の友だちにしようと思ったからでもなかったでしょう。彼らとどうしても「いのちの交わり」を持たなければならない、という心の奥底での止むに止まれぬ気持から、そのようにしたのだと思います。

いやされた足なえは使徒たちと信者たちに依り頼みました。そうしなければ自分の信仰生活が成長しないことを知っていたからです。けれど彼の依り頼みかたは、ペテロとヨハネが彼を背負って歩かなければいけない、といった依り頼みかたではありませんでした。こんにちの信じる者の群れでは、霊的な足なえを兄弟姉妹が抱いて歩かなければいけない、といった状態がしばしば見受けられます。もしそのような状態であるなら、ただ足なえである自分を毎日毎日運んでくれる人を変えたに過ぎない、ことになるでしょう。足なえは毎日毎日近所の人に連れられて「美しの門」の前に置かれました。今度はペテロとヨハネに動かない身体を運んでもらうということになります。これでは何の役にも立ちません。

信じる者の群れの使命はいったい何でしょう。障害を持つ人を背負って歩く責任を持っているのでもありません。足なえの人がいやされて一人で歩くようになったように、体の

不自由な人が主の恵みによって「ひとり立ちするようになってもらう」、これが信じる者の群れの使命なのではないでしょうか。救われた人は、主の力によって歩み、自分で主を経験して前に進むことにしましょう。人の力や努力で、そのようになることはないのです。

ここで、信じる者の間の「誤った交わり」に対する考えに注意しなければいけないと思います。信じる者同士の交わりは内面的な力となります。外面的な支え合いなら、あまり役に立たないのです。足なえは四十年間足を使いませんでした。彼はいやされた時、ペテロとヨハネにしがみつき、やがてくるぶしが強くなり、身体の平衡を取ることができ、しばらくたってから一人歩きするようになったのではなかったのです。そうではありませんでした。いやされた時に、ペテロとヨハネには頼らず、一人で歩いたのです。聖書は、足なえは一人で歩くことができたばかりでなく、おどり上って歩み出した、と記しています。彼は支えを必要としませんでした。主のみ力によっていやされたのですから、一人で歩くことができたのです。

しかし、一人で歩くことができたのに、なぜペテロとヨハネと一緒にいたのでしょうか。それは、いやされた足なえが、自分にはもっともっと知らなければならないことがたくさんあり、それは兄弟姉妹の交わりで知ることができるということを悟ったので、一緒にいたのです。もちろんその時、ペテロとヨハネでさえも、まだまだ知らなければならないことをたくさん持っていました。私たちもまた、古い信者も新しい信者も同じように、まだまだ「もっともっと多くのこと」、「イエス様のこと」を知らなければいけませんし、また知りたいと願っているでしょう。

信じる者の間で交わりを持つことによって、心の成長が期待できるのです。お互いに支え合い、保ち合わなければ、本当の成長は期待できないでしょう。一人で行こうとするとその先は袋小路です。

信者の集いは信仰の成長の場です。心の成長を願う人は、信者同士の交わりを保ち、信者のうちに溶け込み、信者と一つになるのです。他の信者と依り頼み合うこと、お互いに助け合うことこそ大切です。

\* 第二番目。他の信者と一緒に「証しすること」、即ち「イエス様を人に伝えること」。

ペテロとヨハネ、またいやされた足なえが三人でイエス様の救いを証明したわけですが、三人が三人とも救われましたので、他の人々は納得しないわけにはいきませんでした。

先に読みました4章14節を、もう一度読みましょう。

使徒の働き 4章14節

**そればかりでなく、いやされた人がふたりと一っしょに立っているのを見ては、返すことばもなかった。**

とあります。

目には見えませんし、感じることもできません。しかし主の霊は、主イエス様が救い主であられることを人々に証明するために、証しするために、信じる者を全く一つにされたのです。ペテロとヨハネ、また救われた足なえは、マタイ伝の18章20節のみことばを経験したでしょう。「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

この三人は心が一つになっており、イエス様はその人々の中に住み、イエス様がその人々に留まっておられるということが、三人を取り巻く人々に自然に分かったのです。三人の周りには三人に反対する人々が取り巻いていましたが、主イエス様が三人の内におられるということが明らかにされました。これこそ信じる者の集いの務めではないでしょうか。一人一人がばらばらになっていたのではなく、ペテロ、ヨハネ、足なえのこの三人が、主のご栄光を現わしたのです。「主のご臨在」を現わすことこそ、大切です。一つになると、私たちの内から主が光り輝き、現わされるのです。

イエス様のこの証しは、三つに分けられると思います。

「ペテロ」は、群集に向かって語りました。そして主の霊はペテロの言葉を用いて、イエス様を人々に証しされました。

一緒にいたヨハネは話しませんでした。ペテロの傍らに静かに立っているヨハネはイエス様を内に宿し、ご臨在を持ち運び、ペテロの説教を祈りによって支えたのです。

「いやされた足なえ」は、死なれ、復活なさり、そして高められ、今もなお実際に天で生きておられるイエス様の御力を証明する、救われた人でした。

このいやされた足なえの名前はここに書かれていませんが、「イエス様が生きておられる救い主」であられることを証明するためには、大きな役割を果たしました。

これと同じように、信じる多くの者の名前は外に出ませんが、イエス様をまだ信じていない悪魔に捕らわれている人々に、「イエス様が神の御子」であり、「救い主」であられることを証明するために、大きな、大きな役割を果たしていることを忘れてはいけないと思います。いやされた者がいなければ、イエス様を証明する証しは不完全と言わなければいけません。

この3章を見てははっきり分かることは、一人で証ししないで、三人一緒になってイエス様が救い主であられることを証したことです。もし私たち信じる者が本当に一つになるなら、イエス様が救い主であられることを証しすることができます。

「いやされた足なえがそこにいた」ことは、本当に大切なことでした。しかし、ペテロはそのいやされた足なえについては、あまり話さなかったようです。ただ、「いやし主なるイエス様」を人々に語り伝えたのです。彼はイエス様を紹介しただけです。そして、「御霊は

いつもイエス様を中心にしよう」と望んでおいでになります。民の司たち、長老たちは、三人から出てくる超自然の力を説明することはできなかったのです。民の司たちや長老たちは、その力の原因はペテロやヨハネがかつてイエス様の教えを聞いたからだと考えましたが、その理由は間違っており、十分ではありませんでした。なぜなら、いやされた足なえはまだイエス様を見たこともなかったでしょう。しかし、ペテロとヨハネと同じように、本当に深い喜び、平安、静けさを持つようになったのです。

ペテロは次のように言いました。

使徒の働き 3章11節、12節

この人が、ペテロとヨハネにつきまとっている間に、非常に驚いた人々がみないっせいに、ソロモンの廊という回廊にいる彼らのところに、やって来た。ペテロはこれを見て、人々に向かってこう言った。「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのよう

に、私たちを見つめるのですか。」

「なぜ私たちを見つめるのですか」と。

つまり、自分たちではなく、「イエス様」をイスラエルの人々に指し示したのです。人々は三人の中にイエス様を見たのです。三人が一つになっていればいるほど、疑うことのできない証し人となります。その証しは、信者の内に高められたイエス様がおられるという素晴らしい証しです。もしあなたが一人で証しするなら、人々は、あなたをすごい者だと思いかもしれません。しかし、「イエス様が崇められないなら、全ては的外れ」です。「もし私たちが一つになってみんなで証しする」なら、一人一人は見えなくなるかもしれませんが、「イエス様が輝かれる」でしょう。生まれながらの能力は決して問題ではありません。「主のご臨在」が一人一人の内にあることが、一番大切です。ペテロ、ヨハネ、足なえが三人で立っていたとき、イエス様は生きておられ、いと高き主なる神の御座に座しておられることが鮮やかに証しされたのです。

この主を証しすることが信者の群れの責任であり、また「特権」と言わなければなりません。信じる者の群れに加えられたということは、どういうことなのでしょうか。

今話しましたように、

第一番目。他の信者に依り頼み合うこと、お互いに助け合うこと。

第二番目。他の信者と一緒に証しすること。

そして、

\* 第三番目。他の信者と共に戦うこと。

イエス様が、「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中

いるからです。」と言われた時、その信者の群れに悪魔の攻撃が加えられることも、はっきり予告されました。ペテロ、ヨハネ、またいやされた足なえも、このことをまもなく経験しました。もし三人がばらばらに宮に入り、一人で祈ったなら、攻撃はなかったでしょう。しかし三人が、一緒に行き、一緒に証ししましたので反対が起こったのです。一緒に証しするなら、その人数の多少にかかわらず、地獄の攻撃があることでしょう。いやされた足なえは、二人と一緒にいくなら、必ず攻撃が来ることを知っていたのです。

4章を読みますと、いやされた足なえが夜、ペテロとヨハネと一緒に牢屋の中に入れられたことが分かります。

使徒の働き 4章14節

**そればかりでなく、いやされた人がふたりといっしょに立っているのを見ては、返すことばもなかった。**

と書かれています。

いやされた足なえは、ペテロとヨハネと一緒にいたと書いてありますから、夜も牢屋で三人一緒に過ごしたに違いありません。いやされた足なえも一緒に訴えられたということです。足なえはいやされて主のものとなったその最初の夜を牢屋の中で過ごさなければいけなかったとは、祝福された信仰生活の始まりだと言わなければならないのではないのでしょうか。戦いが始まりました。翌日、エルサレムに行き、そこで他の信者に会ったとき、なぜ迫害が大きくなっているかが分かりました。詩篇2篇から2、3節読みます。

詩篇 2篇1節から4節前半

**なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者と共に逆らう。「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」天の御座についておられる方は笑う。**

(聖書の中で、主が笑っておられる箇所はこの箇所しかないと思います。)

詩篇 2篇4節後半から12節

**主はその者どもをあざけられる。ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』」それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。恐れつつ主に仕えよ。お**

**ののきつつ喜べ。御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。  
怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。**

信者たちは許されてエルサレムのひとつところに集まり、その三人と共なる祈りの内に、主イエス様とともに働かれていたのです。三人は詩篇2篇を開き、主に向かって声を上げて祈りました。この一致がありましたので、大きな迫害が伴ったのです。信じる者が全く一つになり、ともに証しするなら、迫害も必ずやって来ます。いやされた足なえも、エルサレムにおけるその祈り会を通して、信じる者の戦いは血肉、即ち人間に対する戦いではなく、天上にいるもろもろの悪霊に対する戦いであるということを信仰生活の初めに知ったのです。

悪魔がこの世を支配しようとする目的は何でしょう。悪魔の憎しみは、「油注がれた主なる神の御子イエス様」に向けられています。イエス様は十字架上で悪魔の働きに打ち勝たれましたが、その戦いは何と大きな戦いだったことでしょうか。「約束された助け主」、「慰め主」である「御霊」が降った記念すべき「五旬節」以来、主のご臨在を現わすものはみな悪魔の攻撃の目的となっています。イエス様を信じる信者の群れに加わったということは、この悪魔との恐るべき「霊的な戦い」に加わったことを意味します。

前に話しましたように、ペテロ、ヨハネ、足なえが迫害にあっていたとき、この三人の属する同じ信じる者の群れが、エルサレムのひとつところに集まり、心を合わせ、祈っていたのです。その時は、詩篇2篇を開いて祈っていましたが、この詩篇2篇は、主の御子がこの世を支配してくださるようという願いを込めた詩(うた)であり、また祈りです。初代教会のこの信者たちと同じように、同じ願いを持つ者は地獄の攻撃を身に覚えるに至るでしょう。

信者たちは、あくまで防御的ではなく、攻撃的でなければいけません。初代教会の人々はあらゆる面から攻撃を受けましたが、決してがっかりしませんでした。逆に、攻撃しました。言うまでもなく、「祈りによって」攻撃しました。

いやされた足なえは、いやされた時大喜びで跳び歩きましたが、この喜びだけを持っていたのでは足りず、また主のうちに救いがあるということ人を人に宣べ伝えるだけでは駄目で、どうしても他の信じる者とともに「祈りを合わせて」戦わなければいけないという思いが、あのエルサレムの最初の祈り会でよく分かったことでしょうか。

信者たちは、平和のために祈りませんでした。また、霊的な戦いが休戦状態になるようには祈らなかつたようです。信者たちは祈りの中で戦いました。主のご臨在を証しし続けるための大胆さを願い求めました。その祈りは直ぐ、たちどころに聞き届けられました。

使徒の働き 4章31節

**彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。**

と書かれています。

私たちが祈りにより、初代教会の信者たちと同じようになりたいものです。疑いもなく、いやされた足なえは、ペテロとヨハネと一緒に大ぜいの信者の群れのところへ行ったに違いありません。もし足なえがいやされたとき、己の道を歩んでいたなら、このような大いなる祝福にあずからなかったでしょう。集まった人々はみな、ペテロとヨハネの兄弟姉妹であり、主は同じです。また、自分とペテロ、ヨハネは兄弟姉妹で、主は一つですから、この信者たちは自分の兄弟姉妹でもあることをよく悟ったことと思います。

足なえがいやされて、ペテロとヨハネと一緒に行くということは何を意味していたのでしょうか。それは、憎しみであり、迫害であり、牢屋であり、霊的な戦いであり、祈りの戦いでした。これは、すべて救われた結果として起こった自動的な結果ではなかったのです。

もし、足なえがいやされた時、そのまま自分の家に帰っていたなら、このようなことは起こらなかったはずです。「一緒にいた」からなのです。すべてこれらの苦しみは困難をともにする生活から起こったものです。またともに証しすることから起こってきたものです。信じる者は、信じる者の群れは、地獄の力を滅ぼし、勝利者なるイエス様の器（うつわ）であり、道具でもあるべきです。私たちが一つになって、ともに生き抜いていくことは、何にもまして大切です。主がこのことに対して私たちの「心の目」を開いてくだされば、本当に素晴らしいことです。

信じる者の群れに加えられたということは、いったい何でしょう。もう一度言いましょう。

- 一番目、他の信者に依り頼み合うこと、互いに助け合うこと。
- 二番目、他の信者と一緒に証しすること。
- 三番目、他の信者とともに戦うこと。

\* 第四番目。他の信者とともに満たされること

信じる者の群れは満たされるどころです。イエス様の満たしは、ともにする生活においてのみ経験することができるということは、主の秘密のようなものです。いやされた足なえは聖霊が何であるか、本当に分からなかったでしょうけれど、他の人々と同じように、御霊に満たされました。

足なえは五旬節について、いろいろなことを知らなかったでしょう。しかし、足なえは五旬節の力を十分に経験しました。

使徒の働き 4章31節

**彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。**

「一同は」とは、集まっていた人々はみな、ということです。

聖霊に満たされた結果として、以前よりもみことばを宣べ伝えイエス様を紹介しました。祈っていた他の信者たちは、五旬節のときに満たされた人々でした。けれどここで新しく満たされなければならなかったのです。これと同じように、私たちも絶えず満たされ続けなければいけないのです。

高く引き上げられ、天におられるイエス様は、「ご自身に属する私たちの満たし」となり、「いのち」となり、「力」となられなければならないのではないのでしょうか。先に読みましたエペソ書 1 章 2 3 節は、非常に大切なみことばです。もう一度読みましょう

エペソ人への手紙 1 章 2 3 節

**教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。**

信者の群れはイエス様のからだであり、またイエス様が満ち満ちておられるところです。この意味を、祈りながらよく考えるべきではないでしょうか。

もし、いやされた足なえが己の道を歩んでいたなら、この満たしを経験しなかったでしょう。足なえは、自分の生活は主にある兄弟姉妹と助け合わなければ成り立っていかないと思いましたので、一緒にいたのです。

コリント人への第一の手紙 1 2 章 1 3 節に書かれていることばも、彼は味わい知るようになりました。次のように書かれています。

コリント人への手紙・第一 1 2 章 1 3 節

**なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。**

一つ御霊により、一つからだとなる事実を、この足なえは経験しました。改心によって、彼は個人的な油注ぎ、聖霊の満たしを経験しなかったのです。足なえは改心して、信者の群れに加えられました。イエス様のからだに加わり、頭（かしら）なるイエス様から、からだなる信者たちに降される満たしにあずかることができたのです。他の兄弟姉妹とともに満たされました。

聖書には書いてないのですが、他の信者たちは必ず、この足なえによって大いに祝福されたのではないのでしょうか。なぜなら、祈り会を始めたのも、足なえのいやしがきっかけだったからです。

信じる者の群れは満たされるどころです。この満たしの内にあって初めて、各々の信者は満足する状態にあるのであり、このとき初めて、各々が各々の奉仕にあずかっている、とすることができるのです。

もし、私たちが主に満たされ生活をしているなら、私たちのこの群れに誰かが入って来るとき、その人も直ちに満たされるのです。

私たちはこのように主に満たされ、「溢れ出るまでに満たされた者」となりたいのではないのでしょうか。

了